

要点の整理

●次の空欄に本文中の語句を入れて、内容を整理せよ。

第一段落 初め〜一三八・9

禅智内供の鼻といえば、池の尾で知らないものはない。長さは五、六寸あって、顎の下まで下がっている。内供は、内心ではア「 「この鼻を苦に病んできた。

第二段落 一三八・10〜一四〇・1

内供が鼻を持てあました理由は、実際にイ「 「だったからだけではなく、この鼻によつてウ「 「自尊心のために苦しんだからである。

第三段落 一四〇・2〜一四二・2

内供は自尊心の毀損をエ「 「しようとな数々の方法を試みるが、鼻はオ「 「として長いままであった。

第四段落 一四二・3〜一四六・9

ある年の秋、弟子の僧が教わってきた鼻の治療を試みると、鼻はみごとにカ「 「なった。こうなれば、もう誰も笑う者はないのにちがいないと内供はキ「 「し、のびのびした気分になった。

第五段落 一四六・10〜一四九・4

内供はク「 「な事実を発見する。以前よりいっそう鼻を見て笑われるようになったのである。内供はなまじいに鼻の短くなったのが、かえってケ「 「なった。

第六段落 一四九・5〜終わり

ある朝、深く息を吸い込んだとき、忘れようとしていたある感覚が内供に帰ってくる。鼻は元のコ「 「 「鼻に戻っていた。内供は、サ「 「心持ちになる。こうなれば、もう誰もシ「 「者はないだろうと考えた。

●次の空欄に本文中の語句を入れて、全体の主題を整理せよ。

長い鼻をもつ禅智内供は、内心では始終鼻を苦にア「　　」きた。鼻によって傷つけられるイ「　　」のために苦しんだのだ。ある年の秋、荒療治を試みると、鼻は短くなった。内供は満足するが、以前にもまして鼻を笑われるようになる。内供はなまじ鼻のウ「　　」なったのがエ「　　」　　」なった。しばらくして、元の長い鼻に戻ると、内供は、はればれした心持ちになった。もう誰もオ「　　」　　」にちがいない。長い鼻のために翻弄される主人公の姿を描く。

芥川龍之介

小説家。辰年辰月辰日辰刻の生まれにちなみ、龍之介と命名された。新原家の長男として生まれるが、生後七か月ごろ、実母が精神に異常をきたしたため、実母の実家である芥川家に引き取られた。東京帝国大学在学中、知人の紹介で、夏目漱石の木曜会に出席し、以後、漱石に師事。文芸同人雑誌「新思潮」に発表した『鼻』が漱石の激賞を受け、文壇での地歩を固めた。古典に題材を得たもの、キリシタンもの、保吉ものと優れた作品を多く発表している。一九二七年（昭和二）、「何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安である」という言葉を遺して服毒自殺した。享年三十五歳。